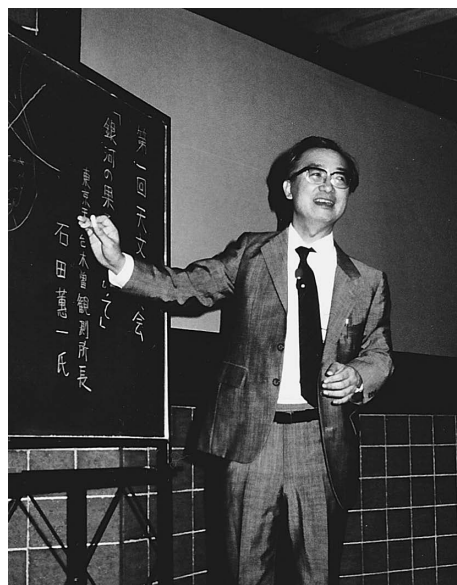


石田蕙一先生を偲ぶ

岡村定矩 (法政大学理工学部)

数年前から体調を崩されていた石田蕙一先生が2013年2月1日に亡くなられた。お生まれは1934年で享年78歳であった。先生は、開成中学(旧制)の英語教師で陶芸家でもあったお父上に伴われて、終戦直前の1945年春、小学6年生のときに埼玉県浦和市から富山県の五箇山へ疎開された。その後砺波市の砺波中学、富山市の富山高校を経て1952年に東京大学に入学された。理学部天文学科をご卒業後、大学院数物系研究科天文学課程博士1年在学中の1958年に、東京大学東京天文台天体掃索部の助手となられた。その後、講師、助教授を経て1984年に教授に昇進された。当初は三鷹勤務であったが、1974年からは木曾観測所勤務となり、1988年の東京天文台改組に伴って、三鷹の理学部天文学教育研究センターに移られ、1994年3月に東京大学を定年退官された。この間、1967-69年にはテキサス大学天文学教室マクドナルド・ポスドク研究員としてアメリカに留学、1985-90年は木曾観測所長、1990-91年は天文学教育研究センター長、また1987-88年には日本天文学会の副理事長を務められた。定年後は、日本大学、横浜国立大学、成城大学などで非常勤講師を勤められ、若い学生たちとの交流を楽しまれたと聞いている。日本大学は72歳まで勤められたそうだ。

石田先生は広い研究分野に関心をお持ちで、とくに、散開星団と散光星雲、銀河および銀河系の構造、小惑星、彗星や新星などの突発天体の観測的研究でさまざまな業績を上げられた。なかでも、木曾観測所のシュミット望遠鏡で撮影した多数の写真乾板を、エジンバラ王立天文台の高速測定機で測定し、1万8千個の星の明るさと色のデータから、銀河系に、薄い円盤と球状のハローに加えて、その中間的性質をもつ厚い円盤があることを確認し、それらの大きさと厚さなどのパラ



講演会にて(1984年)。

メーターを決めた研究は有名である。

石田先生はまた、観測・測定装置の開発でも大きな業績を残された。そのお力が最も発揮されたのは、木曾観測所の建設であったと推測している。石田先生は、指導教官であった鎗木政岐先生らが主催されていた恒星天文学研究会(Stellar Astronomy Meetingの頭文字を取ってSAMと通称されていた)に早くから参加しておられた。1965年頃から、SAMを中心に大型シュミット望遠鏡を日本に建設する計画が議論され始めた。東大闘争が収束した後、東京天文台は大型シュミット望遠鏡計画の実現に本腰を入れはじめ、その実働部隊の中心人物として、石田先生を1969年にアメリカから呼び戻した。テキサス大学のマクドナルド天文台で豊富な観測経験をお持ちの石田先生は、推進役としてまさに適任だったのである。当時日本は、1960年に東京天文台岡山天体物理観測所に導入した英国製の188 cm望遠鏡を使ってまだ日が浅かった。にもかかわらず、世界第四



木曽観測所の所員と共に（1987年夏の特別公開日）。

位の大型シュミットを独自で建設しようとしたのである。石田先生は、当時の銀河系研究室長であった高瀬文志郎教授（初代の木曽観測所長）の下で、観測所建設候補地の選定から始めて、望遠鏡の設計、新設の観測所に設置する写真乾板測定装置の設計と製作などを精力的に行われた。補正板口径105 cmの大型シュミット望遠鏡と各種の写真乾板測定器を擁する東京天文台木曽観測所は、石田先生ご帰国の5年後の1974年に開所した。

私は1978年に助手として木曽観測所に採用され、以来10年間石田先生と「同じ釜の飯を食べる」ことになった。石田先生は当初から現地責任者として、後には所長として木曽観測所の隅々まで熟知され、何事にも迅速な指示を出して観測所を運営されていた。世界第四位というシュミット望遠鏡を擁する木曽観測所で、できるだけ多くの学問的成果を上げなければならないという先生の強い責任感が感じられる日々であった。所長室を返上して暗室に改造し、シュミット乾板の複製製作のために大型のフィルム自動現像機を導入したのも石田先生が所長の時代であった。

木曾はたいへんな山の中で、文化も生活スタイルも都会とは違った。観測所では春になると「境界巡り」と称して、借地の境界標を点検していた

が、途中からは、たらの芽やうどなどの山菜取りのほうの主目的になることもしばしばだった。雨の夜に突然水道が出なくなり、200 mばかり下った沢にある揚水ポンプの点検に、熊に襲われないよう携帯ラジオのボリュームをいっぱいにして懐中電灯を頼りに皆で山を下りたこともあった。石田先生は、そんなときいつも皆の先頭に立って歩かれたものだった。

木曽観測所は東京天文台の改組で大きく揺れ動いた。木曾の諸設備は実質的に全国の研究者の共同利用に供されていた。大学附属となっても共同利用をきちんとサポートできるだろうか、国立天文台から離れて大型装置を維持し発展させる十分な予算が獲得できるだろうか。所長の石田先生と私たち所員は長い長い議論をした。多くの方々のご尽力により何とか見通しも立ち、木曽観測所は東大理学部に残ることになった。石田先生は大晦日の夜まで調整に当たられたと関係者の一人から後に聞いた。

石田先生は小学校4年生のときに天文学者になる決意をされたと聞いている。その志を全うされ、日本の天文学に大きな足跡を残された石田蕙一先生は、すばる望遠鏡からTMTへと発展を続ける後輩たちの活躍をきっと喜んでおられるに違いない。